

アンケート調査結果から分かる本市の学校規模・配置の現状と課題

① 学級数の少ない学校が増えた場合の対応（P15～20）

・保護者は、学校統合よりも、まずは「通学区域の見直し」を望む声が多い（小学校49%・中学校51%）上、学級数の少ない学校が増えても現状のままの学校数を望む声も多い（小学校35%・中学校37%）ことを踏まえると、市内全体としては、早急に統合の検討を進めるよりも、学区の見直しを実施し、学校規模の適正化を図ることとし、統合等に向けては慎重な対応が求められている。

② 1学年当たりの望ましい学級数（P7～8・P11～12）

・その一方で、保護者や教員が共通して望む1学年当たりの学級数と現状の学級数にはギャップが生じている学校が多く存在していることが明らかに。

・「小学校は2～3学級」を望む声が多いため、単学級のある5校（東小・川奈小・富戸小・池小・旭小）については、理想の規模ではない。

・「中学校は4～6学級」を望む声が多いため、南中以外の中学校（北中・宇佐美中・対島中・門野中）は、理想の規模ではない。

③ 1学級当たりの望ましい児童・生徒数（P9～10・P13～14）

・1学級当たりの人数としては、保護者、児童・生徒とも26～30人の規模を望んでおり、中学校の教員も同じ規模を理想としているが、小学校の教員は21～25人規模を望んでおり、理想の規模をどう捉えるかの検討が必要

④ 複式学級に対する意向（P21～22）

・さらに、学校の小規模化により複式学級となることについては、複式学級の良さを理解している割合も比較的高いが、多くの保護者は複式学級以外の対策を望んでおり、さらに教員の75%が複式学級以外の対策を望んでいることを踏まえると、現時点で複式学級となっている川奈小については早急に複式解消を図る必要がある。

⑤ 通学方法と所要時間（P3～6）

・学区の見直しを検討するに当たっては、通学時間は徒歩で30分以内を望む声が多く、それ以上の通学者のためにはスクールバスを望む声も多い。

⑥ 小規模校の課題（P 25～30）

- ・小規模校の課題としては、保護者、児童・生徒、教員が共通して「友達関係の固定化」を一番懸念しており、クラス替えが出来る規模の重要性が明らかに。なお、保護者はそれに次いで「P T A活動の負担増」を懸念している。
- ・中学校になると生徒・保護者とも、部活動の選択肢の幅が狭まることを懸念する意見が多くなっている。
- ・小規模校の良い点として「きめ細かい指導」を強く期待する一方で、教員からは「分掌の負担が大きくなり、学級に目を向ける時間が少なくなる」という意見もあり、ギャップが生じている。

⑦ 大規模校の課題（P 31～38）

- ・大規模校の課題としては、保護者、児童・生徒、教員が共通して「問題が起きても教師が気付きにくい」こと、「子どもへの細かい指導が行き届きにくい」ことを懸念している。
- ・大規模校の良い点として「人間関係の幅の広がり」を強く期待する一方で、児童・生徒は、回答の選択肢以外に「友達のグループが出来たり、人間関係のトラブル」を懸念する意見も多く出されている。

⑧ 小中一貫校に対する意向（P 23～24）

- ・人間関係の固定化等を懸念し、反対する声（14%）がある中、中一ギャップの解消や部活動を始めとする校内の活気を期待し、賛成する声（39%）も多い。
- ・「どちらでも良い」を選択する人の割合が多い（46%）が、同時に「制度が分からない」という意見も多いことから、これは小中一貫校そのものの仕組みや特徴についての周知や記載が無かったことに加え、保護者自身も経験が無いため、「賛否について意見することが難しい」という意味合いが強い。

⑨ その他（P 39）

- ア 指定校変更制度のあり方の見直しを求める意見も多い。
- イ 学区選択制を望む声も多い。